

言語文化学科

ドイツ語フランス語圏言語文化コース ドイツ語圏言語文化領域

副詞的要素の語順に関する日独比較

－状況語に着目して－

学部 文学部

卒業年度 2025 年度

学籍番号 A21LA016

うめだ つばさ

梅田 光翼

目次

0. はじめに -----	1
0. 1. 本稿の目的 -----	1
0. 2. テーマを設定するにあたっての背景 -----	1
0. 3. 本稿の流れ -----	3
1. ドイツ語の状況語とその語順 -----	3
1. 1. 本稿で用いる用語について -----	3
1. 1. 1. 副詞的要素 (Adverbialien) -----	3
1. 1. 2. 状況語 (situative Adverbialien, Situativadverbialien) -----	6
1. 1. 3. 補足語 (Ergänzungen) と添加語 (Angaben) -----	6
1. 1. 4. 結合価 (Valenz) -----	7
1. 1. 5. まとめ -----	8
1. 2. ドイツ語における状況語の配列について -----	10
1. 2. 1. 比較を目指すにあたって -----	10
1. 2. 2. 先行研究の見解 -----	10
1. 2. 2. 1. Duden (2016) における見解 -----	10
1. 2. 2. 1. 1. Duden (2016) における状況語 -----	10
1. 2. 2. 1. 2. Duden (2016) における状況語の 語順 -----	11
1. 2. 2. 2. 田中・パウアー (2024) における状況語の 語順 -----	15
1. 2. 2. 3. 山本 (2000) における状況語の語順 -----	17
1. 2. 2. 4. グロース (2000) における状況語の語順 -----	18
1. 2. 2. 5. 井口 (2000) における状況語の語順 -----	20
1. 2. 2. 6. まとめ -----	21
2. Strafe を用いた、状況語に関するサンプル調査 -----	22
2. 1. サンプル調査について -----	22
2. 1. 1. サンプル調査の背景 -----	23

2. 1. 2. サンプル調査に用いる資料について -----	23
2. 1. 3. サンプル調査の対象とする文について -----	23
2. 1. 4. サンプル調査の方法 -----	23
2. 2. サンプル調査の結果、考察 -----	24
2. 2. 1. サンプル調査の結果 -----	24
2. 2. 2. 全体の概観 -----	25
2. 2. 3. 様態と場所の副詞的要素の語順について -----	26
2. 2. 4. 状況語と前域の関わり -----	28
2. 2. 5. まとめ -----	30
3. 日本語の状況語とその語順、及びドイツ語の状況語との比較 -	31
3. 1. 日本語の状況語とその語順 -----	31
3. 1. 1. 日本語の状況語を検討するにあたって -----	31
3. 1. 2. 日本語の副詞的要素 -----	31
3. 1. 3. 日本語の状況語 -----	32
3. 1. 4. 日本語の補足部と修飾部 -----	33
3. 1. 4. 1. 補足部と修飾部 -----	33
3. 1. 4. 2. 補足部の添加性 -----	35
3. 1. 5. 結合価の観点 -----	36
3. 1. 6. 日本語の題目部 -----	36
3. 1. 7. 日本語における状況語配列の例 -----	37
3. 1. 8. まとめ -----	39
3. 2. ドイツ語と日本語における状況語の配列の相違点 -----	39
4. 終わりに -----	42
4. 1. ドイツ語から日本語を理解するにあたって -----	42
4. 2. 日本語からドイツ語を作成するにあたって -----	43
4. 3. 調査の限界と今後の課題 -----	44
注 -----	46
参考資料 -----	47
参考文献 -----	48

0. はじめに

0. 1. 本稿の目的

本稿の目的は、状況語に関し、ドイツ語に日本語と類似している要素が存在することを示すことである。そのためにまずは、先行研究では必ずしも一致していないドイツ語の状況語の基本的な語順について、小説内からサンプル文を得て行う調査を通じて、語順がより固定的な状況語と、語順が比較的柔軟な状況語があることを示す。そして、日本語の状況語の語順と比較することで、両言語はいずれも語順に一定の自由度を持ち、語順が固定される要素も類似していることを明らかにする。これらの共通点から、日本語話者は状況語を含むドイツ語文を理解する際に、特別な意識を払う必要はないことを示す。

0. 2. テーマを設定するにあたっての背景

本稿で研究対象とする状況語とは、副詞的要素の一種である。副詞的要素とは、品詞としての副詞に限らず、文や用言を修飾する機能を持つ文成分のことである。副詞的要素が持つ機能は、Duden (2016: 794, 795)によれば命題外機能と、命題内機能に分けられる。命題とは「いつどこでなぜ誰がなにをどうする (井口 (2000: 6))」を表すものである。

命題外機能を持つ副詞的要素は、事態に対する話者の心情、評価などを表したり、発言の流れを明確にしたりするために用いられる。命題の外にあるということは、井口 (2000: 6)によれば、命題のように疑問詞で問うことができず、現実世界に指示対象を持たないということである。例えば以下の、例文 (1) 及び (2) の、筆者が下線部を引いた副詞的要素は現実世界に指示対象がない。(1) の *wahrscheinlich* などは、叙述内容が成立すると話者が判断する確からしさの程度を、(2) の *zum einen* 及び *zum anderen* は、プロジェクトが否決された原因を列挙する文と文の関係を示している。(例文は Duden (2016: 794, 795)より引用している。)

(1) Anna kommt wahrscheinlich / vielleicht / sicher / angeblich.

(2) Das Projekt ist abzulehnen: Es kostet zum einen viel zu viel,
und zum anderen zeitigt es unerwünschte Nebenwirkungen.

5 そして 2 つ目が、命題内機能の副詞的要素である。命題内というこ
とは、先ほどとは逆に、現実世界に指示対象を持つのであり、疑問副
詞等によって問うことができる。状況語は、この命題内機能を持つ副
詞的機能に含まれる。なぜなら状況語は、ある事象が起こる、あるい
は事象を起こす際、その場の状況（いつ、どこで等）や周辺情報を記
10 述する語であるからだ。

 ここまで、状況語の機能は副詞的要素の中でも命題内機能に分類さ
れることを述べた。本稿で状況語に着目し、日本語とドイツ語での語
順を比較する理由は、添加的に表現される状況語の自然な配置につい
て疑問を抱いたからである。以下、状況語の配列として認められる語
15 順について例文を挙げる。状況語は下線部によって示した。ドイツ語の
テストで赤点を取ってしまったという状況を仮に前提とすれば、(3a-
c) の発話が考えられる。

 (3a) Ich habe heute deswegen an der Uni fleißig Deutsch gelernt.
20 (3b) Ich habe deswegen heute an der Uni fleißig Deutsch gelernt.
 (3c) Ich habe an der Uni deswegen fleißig heute Deutsch gelernt.

 ドイツ語は、動詞句の配置や句単位のまとまり等のルールはあるもの
の、語句の配置については概ね寛容であることが知られており、この
25 ようにいくつかの語順のパターンが考えられ得る。いずれも文法的に
間違った文ではないが、異なる語順は異なるニュアンスを与えるので
はないかと考え、自然な基本的語順というテーマに興味を抱いた。

 実際の言語使用においては、(3b-d) のように 1 つの文に 2 つ以上
の状況語が含まれることは少ないかもしれない。中島・平尾・朝倉
30 (2003) の文法書において状況語の項で紹介されている例文は、いず
れも 1 つの文に 1 つの状況語が含まれているにとどまる。しかし、
Duden (2016) のような、より総合的かつ包括的な文法書には、複数

の状況語が含まれる文の紹介が存在しており、1つの文中に2つ以上の状況語を含めることは可能である。ドイツ語の学習が進み、状況語が1つの文に複数含まれるケースに触れる機会が多くなれば、中級以上を目指す者は、ドイツ語と日本語における状況語の特徴を理解していることによって、より自然な文の理解や発話が可能になるのではないかと考えた。

0. 3. 本稿の流れ

第1章では、ドイツ語における状況語とは何か、そしてその語順についての先行研究を概観し、その内容を整理する。最初に、本稿で用いる用語を確認する。そして、先行研究において論じられている状況語の語順について、それぞれの主張をまとめる。続く第2章で、サンプル調査として、Ferdinand von Schirach（フェルディナント・フォン・シーラッハ、1964-）の *Strafe* を用いて、実際の文を基に、ドイツ語の状況語の語順を分析する。第3章では、比較対象に据える日本語についてまとめ、第1章及び第2章の結果と比較する。まずは、ドイツ語の状況語に相当する表現が日本語にも存在していることを確認する。それによって判明したドイツ語と日本語における状況語の基本的語順を比較する。最後の第4章では、比較結果の応用として、日本語を母語とするドイツ語学習者に対し、ドイツ語を理解するにあたって留意すべき点を提案する。

1. ドイツ語の状況語とその語順

1. 1. 本稿で用いる用語について

ドイツ語の状況語を取り扱うにあたって、まずは本稿で用いる用語を確認する。タイトルにも挙げられている副詞的要素や状況語については、本稿冒頭においてもごく簡単に触れたが、本章であらためて説明をする。各種用語の説明は井口(2000)、Duden(2016)を参照した。

30

1. 1. 1. 副詞的要素 (Adverbialien)

本項では、状況語とは何かを説明するために、副詞的要素と、それ

5 5 10 15 20 25
が持つ機能について井口（2000：1-8）を参考に整理する。まず副詞的要素とは、文中において副詞の役割を果たす語、もしくは句のことであり、必ずしも品詞としての副詞¹のみを指すカテゴリではない。そしてこの副詞的要素の機能は、現実世界に指示対象を持つか否かにより、それぞれ命題内機能と命題外機能に分けられる。命題とは「いつどこでなぜ誰がなにをどうする（井口（2000：6））」を表すものである。命題の一部を担う副詞的要素は、命題内機能を持つ。一方で、nicht や wahrscheinlich のように、それ自体は現実には指示対象を持たないものは命題外機能を持つ。1. 1. 2. で詳述する状況語は、「いつ、どこで、なぜ、どのように」を示すものであるから、このうちの命題内機能に分類される。

副詞的要素は品詞として副詞に限るものではないと述べた。ここからは副詞的要素がどのような形を取るかについて、いくつか例を挙げる。まずは、副詞（Adverbien）である。文中の該当する語には下線を引いている。

(4) Heute regnet es.

(5) Er ist immer fröhlich.

20 25
次に挙げるのは、品詞としては形容詞（Adjektive）であるが、副詞的にも用いられることが可能な形容詞である。形容詞には大きく分けて3つの役割が存在する。1つ目は述語的（prädikative Adjektive）な、2つ目は付加語的（attributive Adjektive）な、そして3つ目は本稿で取り上げる副詞的（adverbiale Adjektive）な役割である。以下(6)が副詞的に用いられる形容詞の例である。

(6) Er tanzt gut.

30
さらには、名詞句（Nominalphrasen）も時に副詞的に扱われることがある。ドイツ語における名詞は、格、数、性の文法的特徴を有する。この特徴の中で、名詞句が副詞的に振舞う際重要な役割を果たすのは、格である。ドイツ語における名詞の格は主格（Nominativ）、属格

(Genitiv)、与格 (Dativ)、対格 (Akkusativ) の 4 つが存在するが、
単独で副詞的要素になりうるのは、属格と対格である²。属格は、単独
では、代表的には付加語として用いられることが多く、対格は動詞や
形容詞の目的語となることが多い。しかしこれら 2 つの格は、文の中
5 で副詞的な役割を果たすことがある。以下 (7) (8) に例を示す。

(7) Ich möchte eines Tages einmal Deutschland besuchen.

(8) Gestern war ich den ganzen Tag zu Hause.

10 最後に、前置詞を核としたいくつかの語の集まりである前置詞句
(Präpositionalphrasen) について述べる。前置詞句は、名詞句と同
じように句として副詞的要素に数えられる。以下 (9) (10) を参照さ
れたい。

15 (9) Wir treffen uns morgen auf dem Bahnhof.

(10) Ich frühstücke jeden Tag um 9 Uhr.

以上が代表的かつ、本稿で取り扱う副詞的要素である。本来であれ
ば、例の (11) や (12) のように、副文や zu 不定詞句も副詞的要素に
20 なり得る。(11) の下線部は食べ過ぎたことによるという、原因・理由
を示しているし、(12) の下線部はドイツ語を学習するためという、目
的を表している。

(11) Er ist krank, weil er zu viel gegessen hat.

25 (12) Er ging nach Deutschland, um Deutsch zu lernen.

しかしながら、これらの構文は、1 つのまとまりとして文中における
配置がある程度決まっており、かつ本稿では 1 つの文の中における副
詞的要素の語順に焦点を当てることを目的とするため、これら副文や
30 不定詞句全体で副詞的要素となるものについては扱わない。

1. 1. 2. 状況語 (Situative Adverbialien, Situativadverbialien)

本稿において着目したいのは、副詞的要素の中でも特に、命題内機能を持つ状況語であることを既に説明した。状況語とは読んで字のごとく、事柄が起こる状況を記述するものである。Duden (2016: 795) を参考にすれば、状況語は4つのグループに大別することができる。それは、時 (Temporal-)、因果 (Kausal-)、様態 (Modal-)、場所の副詞的要素 (Lokaladverbialien) である。これらは、疑問副詞 (wann, wo, wie, warum etc.) で問われることが多い。³以下に例を示す。Aの発言における下線部は疑問副詞を、Bの下線部はそれに対応する状況語を示している。(13)は時、(14)は因果、(15)は様態、(16)は場所の副詞的要素に着目した例文である。

(13) A: Wann kommst du zur Uni?

B: Ich komme zur Uni gegen 12.

15 (14) A: Warum kannst du nicht kommen?

B: Ich kann wegen dem schlechten Wetter nicht ausgehen.

(15) A: Wie arbeiten die Bienen?

B: Sie arbeiten fleißig.

(16) A: Wo wollen wir uns morgen treffen?

20 B: Treffen wir uns auf dem Bahnhof!

1. 1. 3. 補足語 (Ergänzungen) と添加語 (Angaben)

前項までで、副詞的要素と、その中の状況語について説明をした。本項では、本稿で扱う状況語についてさらに範囲を限定するために、
25 補足語 (Ergänzungen) と添加語 (Angaben) について紹介する。前項では状況語の、文中における意味的役割にのみ焦点を当てていた。そこで、意味的役割に対し統語的役割からも、本稿で扱う状況語の範囲を限定することが本項の目的である。

ドイツ語には動詞の意味に紐づいた、自由に付け加えたり、省略したりすることが許されない補足語と、逆に添加や省略が自由な添加語とが存在する。具体的な例を以下の例文(17)にて示す。例文は Duden (2016: 779) から引用したものであり、各種下線は筆者である。波線

は例文における補足語であり、実線は添加語を示している。

(17) Sie stellte rasch eine Kerze auf den Tisch.

- 5 動作主の様態を表す *rasch* と、場所を表す *auf den Tisch* は、いずれも前項で述べた状況語に該当する。しかし文法的には *rasch* と *auf den Tisch* は異なる役割を持っている。補足語は、動詞句 (*Verbphrasen*) に含まれており、動詞とまとまった構造をしているから、文中の右側に配置される。そのため語順は、代名詞等の例外はありつつも、比較
- 10 的固定的であると言える。そのため今回は、より流動的な添加語間の語順に着目する。

1. 1. 4. 結合価 (Valenz)

- 補足語と添加語を判断するにあたって重要な観点が結合価である。
- 15 結合価とは、文構造の中に特定の品詞、形態、機能によって埋められる空位を作る、動詞の能力である。前項における補足語の説明で、1つの文にどのような種類の補足語がいくつ必要か、ということは動詞の意味で決まることを述べた。具体的に先に挙げた例 (17) で言えば、この文において *stellen* という動詞は、(～を～へ置く、立てる) という意味で用いられている。そしてこの意味では、結合価辞典⁴によれば、*stellen* は [*jemand, etwas, irgendwohin*] という3つの要素を補足語として要求する。そのため、(18) のような文は許容されるが、(19) は文法的に間違いとされる。以下、補足語に下線部を引いている。
- 20

- 25 (18) Sie stellte eine Kerze auf den Tisch. (添加語 *rasch* を省略)

(19) *Sie stellte rasch auf den Tisch. (補足語 *eine Kerze* を省略)

- 一方で、これが動詞 *stellen* の別の意味、例えば (～を用意、調達する) であったならば、*irgendwohin* は補足語として要求されない。これが、動詞の意味によって要求される補足語の数とその意味が変わり得るということであり、必ずしも1つの動詞に1つの結合価規則しか
- 30

ないというわけではない。

- 結合価は空位の数に応じて、零価、一価、二価（主語と目的語を要求する）というように表される。補足語と違い、添加語はこの数字に関係していない。この結合価を参考にすることによって、ある語句が、
- 5 動詞が要求する補足語なのか、添加語なのかを判断することができる。これにより、状況語の中でも、特に添加語の状況語に着目して調査することが可能になると考える。

1. 1. 5. まとめ

- 10 最後に、改めて本稿において最も重要な要素の状況語についてまとめたい。状況語は副詞的要素の中で命題内機能を持つものであり、状況を記述する。しかし先ほどの補足語と添加語の概念を状況語に適用してみれば、①補足語たる状況語と②添加語たる状況語の2つが存在
- 15 することが分かる。①の例を(20)(21)に、②の例を(22)(23)に示す。

(20) Mein Geburtstag ist am 1. Januar.

(21) Wir fahren mit dem Zug nach Nara.

- 20 (22) Er arbeitet schon lange dort.

(23) Wir machen in Nara einen Stadtbummel.

- これらの例文はいずれも、時や場所を示す状況語を含むが、それら状況語の省略の可否に違いが現れている。今回取り扱うのは(22)の
- 25 langeや(23)の in Naraのような、文法上は省略が可能な、添加語たる状況語である。

以上を表にまとめたものが表1である。

		文成分（統語的観点）	
		補足語 (動詞に支配される)	添加語 (動詞に支配されない)
副詞的要素 (意味的観点)	話法詞、心態詞等 (命題外機能を持つ)		wahrscheinlich , ja, doch etc.
	状況語 (命題内機能を持つ)	・ Mein Geburtstag ist <u>am 1. Januar.</u> ・ Wir fahren mit dem Zug <u>nach Nara.</u>	・ Er arbeitet schon <u>lange</u> dort. ・ Wir machen <u>in Nara</u> einen Stadtbummel.

表 1 本稿で扱う用語のまとめ

なぜ補足語を取り上げないかと言え、添加語と補足語の間には基本的な配列順序があるからである。必須の要素として動詞に要求される補足語は、動詞との結びつきが強い。中島・平尾・朝倉（2003：148）では、「定動詞との結びつきが強いものほど、また伝達価値が高いものほど後ろに置く」と示されている。そのため、補足語は添加語よりも文中において後ろに位置することが多い。（24a）は補足語 nach Tokyo と添加語 allein が含まれる文であり、補足語が添加語より後ろに配置される基本的な順序である。一方で（24b）は添加語が補足語より後方に位置されており、基本的な語順とは言えない。添加語には波線を、補足語には下線を引いている。

（24a）Sie fährt allein nach Tokyo.

（24b）Sie fährt nach Tokyo allein.

基本的な語順として概ね統一的な見解が得られている補足語たる状況語の語順については本稿では取り上げず、添加語たる状況語に限定し、語順の調査対象とする。

1. 2. ドイツ語における状況語の配列について

1. 2. 1. 比較を目指すにあたって

5 本稿の目的は日本語とドイツ語における状況語の語順を比較することである。そのためにまず、それぞれの言語で状況語の語順に関し、どの程度一致した見解があるのか、もしくは違った見解があるのかについて、先行研究の整理をする。まずはドイツ語の状況語の語順について述べた先行研究から見解をまとめる。

10 ここでは、Duden (2016)、田中・バウアー (2024)、山本 (2000)、グロース (2000) 及び井口 (2000) の見解をまとめる。

1. 2. 2. 先行研究における、状況語の語順に関する見解

1. 2. 2. 1. Duden (2016) における見解

15

1. 2. 2. 1. 1. Duden (2016) における状況語

状況語の語順に関して、最も細やかな説明を行っているのが、Duden (2016) であると考えたため、最初に取り上げる。

20 まず Duden (2016: 884) では、中域における副詞的要素を、4つのグループに大別しており、それらは以下の引用に示す数字の順に並べられるのが標準的な語順であるとしている。

1. Adverbialien, die den räumlichen und zeitlichen Rahmen festlegen, für den die Aussage des Satzes gilt

25

(文の叙述内容に当てはまる、空間的、時間的枠組みを定める副詞的要素)

2. Kommentaradverbialien sowie verwandte Partikeln

(話者の心情、評価などを表す副詞的要素、および類似の不変変化詞)

30

3. Situative Adverbialien (状況を表す副詞的要素)

4. Richtungsadverbialien (方向の副詞的要素)

1 つ目のグループに関しては、その役割から Duden (2016: 884)において Thematische Adverbialien と呼称されている。2 つ目のグループに関して、話者の評価的情報を示すことは命題外機能（言表態度）に関するものである。そのため、命題内機能に分類される、状況語を扱う今回のテーマとは一致しない。同様に、4 つ目のグループである Richtungsadverbialien は、方向を意味することから分かるように、移動を含む動詞の要求する補足語であることが多く、本稿で取り扱う対象の状況語には当てはまらない。そのため、本稿で考えるのは、1 つ目のグループである Thematische Adverbialien と、3 つ目の Situative Adverbialien である。

1. 2. 2. 1. 2. Duden (2016) における状況語の語順

Thematische Adverbialien については、時と場所の副詞的要素が挙げられている。意味に着目して考えれば、これは状況語にカウントすることが可能だと思われる。この 2 つの副詞的要素における語順については、時の副詞的要素が先行し、場所の副詞的要素が続く。

また、Thematische Adverbialien の特徴の 1 つとして、前域にも配置されやすいことが示されている。前域の役割を示した Duden (2016: 888)において、

Am Anfang von Texten stehen oft Satzglieder im Vorfeld, die es ermöglichen, die Äußerung persönlich, zeitlich oder örtlich einzuordnen. (Duden (2016: 888))

(発話を人称的、時間的もしくは場所的に整理できる文肢は、テキストの冒頭に前域へ配置されることがしばしばある。)

とされている。つまり、Thematische Adverbialien は発話を時間的もしくは場所的に整理することができる。

次に示すのは、Duden (2016: 884, 845) より副詞的要素の 3 つ目のグループである Situative Adverbialien の語順を引用したものである。各項目の前に付けた数字は、各項目間の語順を明瞭にするため、筆者が施したものである。

Situative Adverbialien

(状況を表す副詞的要素)

- 5 1. rhematische Temporaladverbialien (Zeitpunkt), z.B. *im Mai*
(レーマ (展題) を示す、時の副詞的要素 (時点))
2. Adverbialien, die eine Wiederholung ausdrücken, z.B. *dreimal, ständig*
(反復を表す副詞的要素)
- 10 3. Adverbialien, die eine Dauer ausdrücken, z.B. *den ganzen Tag*
(期間を表す副詞的要素)
4. Adverbialien, die einen Grund angeben, z.B. *wegen seines Hustens*
(理由を表す副詞的要素)
- 15 5. Modaladverbialien mit Ereignisbezug, z.B. *endlich, schließlich*
(出来事に関連した様態の副詞的要素)
6. Adverbialien, die eine Begleitung angeben, z.B. *mit ihren Kolleginnen*
20 (同伴する人、物を表す副詞的要素)
7. Adverbialien, die die Subjekthaltung zum Ausdruck bringen, z.B. *gern*
(主語の態度を表す副詞的要素)
8. Adverbialien, die ein Mittel oder ein Werkzeug bezeichnen, z.B. *mit Messer und Gabel*
25 (方法や手段を表す副詞的要素)
9. Modaladverbialien im engen Sinn, z.B. *eifrig*; außerdem prädikative Angaben, z.B. *gesund, flüsternd*
(狭義の様態の副詞的要素、加えて述語の状態描写をする添加語)
30
10. Rhematische Lokaladverbialien (Ort), z.B. *in Mannheim*
(レーマ (展題) を示す、場所の副詞的要素 (地点))

Duden (2016: 795-797)では、これら 10 項目のような状況を示す文成分について、より大きな意味のまとまりに基づいて 4 つのグループに大別している。以下の表 2 にその内訳をまとめる。表は筆者が Duden

5

(2016: 795-797)を参考に、例文等を省略して作成した。左枠には状況語の意味（時、場所等）とその意味における詳細な項目を記載している。右枠に記載しているのは、各項目に対応する代表的な疑問詞である。

10

Temporaladverbialien	Fragewort
・ Zeitpunkt (1) ・ Frist ・ zeitlicher Ausgangspunkt ・ zeitliche Erstreckung, zeitliches Maß (3), Wiederholung (2)	・ wann? ・ bis wann? ・ seit wann? ・ wie lange? wie oft?

Kausaladverbialien	Fragewort
・ Grund oder Ursache im engeren Sinn (4) ・ konditional: Bedingung ・ konsekutiv: Folge, Folgerung⁵ ・ final: Zweck ・ konzessiv: unwirksamer Gegen Grund	・ warum? ・ in welchem Fall? unter welcher Bedingung? ・ in welcher Absicht? ・ trotz welchen Umstands?

15

Modaladverbialien	Fragewort
・ Vorgehensweise (7), (9) ・ Grad, Maß, Intensität ・ gradueller Unterschied ・ stoffliche Beschaffenheit ・ instrumental: Mittel oder Werkzeug (8) ・ Begleitung (6)	・ wie? ・ wie viel? wie sehr? ・ um wie viel ・ woraus? ・ womit? wodurch? ・ mit wem?

Lokaladverbial	Fragewort
・ Ort (10) ・ Richtung, Weg, Ziel ・ Herkunft ・ räumliche Erstreckung, räumliches Maß	・ wo? ・ wohin? ・ woher? ・ wie weit?

表 2 状況語の各グループにおける詳細な意味と対応する疑問詞⁶

表 2 には (5) Modaladverbialien mit Ereignisbezug に対応する要素が見られない。しかし、Modaladverbialien mit Ereignisbezug は、出来事全体における展開の様態を表す副詞的要素ということができ、文全体を修飾する役割を担っている。よって様態の副詞的要素に数えることが可能であると考ええる。様態の副詞的要素には、行為者の様態を示すものの他に、出来事の様態を示すものが存在するからだ。よって、括弧によって示したように、1 から 3 が時を、4 が因果を、5 から 9 が様態を、10 が場所を表す副詞的要素であることが分かる。

これにより、Duden (2016: 884, 885) で主張されている状況語 10 項目の語順は、Duden (2016: 795-797) の分類に照らせば、4 つのグループに対応させて考えることが可能であると考えられ、

時 → 因果 → 様態 → 場所

このように表すことが出来る。

しかし、表 2 を見れば、Duden(2016: 884,885)が状況語の語順につ

いて一覧として述べた *Situative Adverbialien* の 10 項目は、あくまで状況語全体から代表的に取り上げられたものであることが分かる。なぜなら、実際には、表 2 において述べられている時、因果、様態、場所の大きな 4 つのくくりの中には、より細分化された要素が見受けられ、その数は 10 よりも多いからである。例えば、先述の 10 項目にはない、属格を主として要求する前置詞 *trotz* は、表 2 の *Kausaladverbialien* における *konzessiv* に該当し、譲歩を意味しており、因果に分類されているが、*Situative Adverbialien* の語順には取り上げられていない。そのため、全ての詳細な意味ごとに羅列をすれば異なる語順が示される可能性は存在している。

最後に、*Thematische Adverbialien* と *Situative Adverbialien* をまとめた状況語の語順を以下に示せば、

テーマを示す時→テーマを示す場所→時→因果→様態→場所

となる。*Duden* (2016)によればこれらは絶対のルールではなく、中域においても入れ替わり得るし、前域への移動も可能であるとしている。

1. 2. 2. 田中・バウアー (2024) における状況語の語順

本項では田中・バウアー (2024) における副詞と本稿での状況語について用語を整理し、田中・バウアー (2024) が主張する副詞の配列について、補足語と添加語の両方が含まれていることを明らかにする。

田中・バウアー (2024) は、副詞の配列については、テカモロ⁷の順に並べるとしている。語順について論じる前に、まずは田中・バウアー (2024) における副詞について、本稿で用いる用語との関連を基に整理する。田中・バウアー (2024: 13) では副詞の説明が以下のようになされている。

動詞を修飾する動詞関連の副詞のほか [中略] 話者の心情に関する発話関連の副詞となるものもある。形容詞がそのままの形で副詞になるものも多いが、形容詞の対応語を持たない純粋な副詞や、名詞句が副詞的に用いられる (副詞的 2 格や副詞的 4 格など) こ

ともある。(田中・バウアー (2024: 13))

前半部分では動詞を修飾する、本稿での命題内機能を持つ副詞的要素と、心態詞や話法詞に代表される命題外機能を持つ副詞的要素の説明
5 を行っている。ここでは意味的観点から田中・バウアー (2024) における副詞を説明している。引用後半では副詞がどのような品詞から成り立つかについて説明を加えている。

形容詞や名詞句も副詞の役割を果たすことについて、本稿の用語である副詞的要素と差異はほとんどない。唯一の違いは前置詞格を説明
10 に取り入れたか否かである。しかし、田中・バウアー (2024: 24) が副詞の語順を説明する際には、nach Osaka という前置詞句が、場所を表す副詞として取り上げられている。このことから、引用には代表的に形容詞と名詞句が取り上げられたと判断できる。そのため、田中・バウアー (2024) における副詞は、本稿での副詞的要素と読み替える
15 ことが可能だろう。

副詞的要素の機能は命題外機能と命題内機能に分けられる。田中・バウアー (2024) が主張する副詞の配列にはどちらの機能が主張されているのかを確認する。本項冒頭で述べたように、田中・バウアーは
(2024) は副詞の配列についてテカモロ (いつなぜどのようにどこで
20 (へ)) の順であると主張している。このテカモロは動詞を修飾するものであり、命題内機能を持っている。つまり田中・バウアー (2024) が述べる副詞の配列とは、命題内機能を持つ副詞的要素、つまり状況語の語順であると言える。

そしてテカモロの配列の根拠づけとして田中・バウアー (2024) は
25 以下のように述べている。

テが最も動詞から遠く、つまり文全体に関わる副詞である (よって前域にも来やすい)。ロが最も動詞に近く、つまり動詞の補足語になったり、あるいは極めて密接に動詞を修飾する。(田中・バウ
30 アー (2024: 24))

この主張をまとめれば、状況語の語順は、

時 → 因果 → 様態 → 場所

となる。この配列で並べられた文として田中・バウアー（2024: 24）
5 が挙げた例文が（25）である。

（25） Er ist gestern deshalb allein nach Osaka gefahren.

テ カ モ ロ

田中・バウアー（2024: 24）

10

本稿での状況語は、統語的観点として、添加語に着目したものである。しかし（25）において場所の副詞的要素（ロ）は、補足語として用いられることにフォーカスが当たっていると思われる。（25）における動詞 *fahren* は、動作主と方向の副詞的要素を補足語として要求して
15 いる。そのため、時の副詞的要素（テ）の *gestern*、因果の副詞的要素（カ）の *deshalb*、そして様態（モ）を示す副詞的要素の *allein* は添加語である。一方で *nach Osaka* は補足語として動詞 *fahren* に要求されている。この点で、この例文では場所（ロ）の副詞的要素のみ文法的役割が異なっている。田中・バウアー（2024）は、補足語として用い
20 られている方向の副詞的要素を、場所の副詞的要素に数えて例として挙げている。そのため添加語のみの語順を示しているわけではない。本稿では状況語の中でも、特に添加語に着目するため、田中・バウアー（2024）が示した、補足語に焦点が当たった語順と、添加語である場所の副詞的要素を扱った他の先行研究が示す語順には差異が見られ
25 るかもしれない。

1. 2. 2. 3. 山本（2000）における状況語の語順

山本（2000: 158）は、ドイツ語の中域における配語は比較的自由だ
とした上で、標準的な配列が存在すると述べている。中域における配
30 列を図で示したものが以下の図1である。

A 伝達価値の 小さな補足語	B 添加語	C 不特定の主語 と3格目的語	D 否定詞	E 文や動詞にか かる副詞(句)	F 重要な補足語
1. 人称代名詞 2. man. 3. 特定の補 足語	4. 心態詞、 5. 時、場所な どの状況語、 6. 話者の評価 語	7. ein+名詞 8. einem+ 名詞、 etc.	9. nicht, kaum, etc.	10. gern, fleißig etc.	11. 前置詞目的語、 2格目的語、 様態補足語 1格補足語

図1 山本（2000: 160）における中域の語順

山本（2000: 160）では B における 5 のみ状況語として題が付けら
5 れているが、これに E における 10 を加えたものが本稿で調査対象と
する状況語にあたる。5 における時間や場所等の状況語は、列挙され
ているものの、語順は明確に言及されていない。因果を示す状況語に
ついては図1における5の説明には挙げられていないが、5の具体例
を示した中に「原因、条件、結果」と項目が立てられている。つまり
10 山本（2000）の見解では、状況語は、

時・因果・場所（順不同）→様態

の順に表現されるということになる。

15 図1を見れば、山本（2000）は F の 11 において、補足語をまとめ
た項を立てていることが分かる。そして 11 は山本（2000）が主張する
中域の語順において最も後ろに配置されている。B が添加語のグルー
プを表していた点から、図1からは、添加語が補足語に対し先行する
ことが読み取れる。

20 山本（2000）は他にも、旧情報が先行し、新情報は後に来るという
原則や、文成分の長さにより短いものが先行し、長いものは後に来る
という原則を示している。

1. 2. 2. 4. グロース（2000）における状況語の語順

25 グロース（2000）の主張のポイントは、補足語と状況語の違いを明
確に意識した説明であることだ。以下に、グロース（2000: 128）から、
ドイツ語文の構成をまとめた図を引用する。



図2 グロース（2000）における、ドイツ語文の構成

5 グロース（2000）は日本人ドイツ語学習者がよくする間違いの1つに、補足語⁸と添加語の語順の間違いがあると指摘している。以下の例文（26a）を題材に、（26b-d）を認容度が低い文として紹介している。

10 (26a) Ich gehe mit meiner Mutter zum Einkaufen nach Toyohashi.

(26b) Ich gehe zum Einkaufen nach Toyohashi mit meiner Mutter.

(26c) Ich gehe nach Toyohashi mit meiner Mutter zum Einkaufen.

15 (26d) Ich gehe nach Toyohashi zum Einkaufen mit meiner Mutter.

（グロース（2000: 130））

この文においてグロース（2000）は、nach Toyohashiを完全な補足語
20（図2ではErgänzung）、zum Einkaufenを、動詞との結びつきは存在するが不必要な補足語、そして mit meiner Mutterを完全な添加語（図2ではAngabe）としている。添加語は補足語の前に配置され、複数の補足語の間では不必要な補足語が先行すると述べている。（26b-d）
25の認容度が低い理由には、この主張を示した図2における、AngabeとErgänzungが区切られていることから説明ができる。動詞gehenが要求する補足語は、動作主と方向の副詞的要素である。（26a）では、動作主は前域に配置され、方向の副詞的要素は、添加語である mit meiner Mutter および、グロース（2000）が不必要な補足語とする zum

Einkaufen より後ろに配置されている。このため、(26a) が標準的な文である。(26b) は補足語である nach Toyohashi が、添加語である mit meiner Mutter や必要な補足語である zum Einkaufen の前に配置されているため、認容度が低い。(26c) 及び (26d) は添加語が 2 つの補足語より後ろに配置されているため認容度が低い。

グロース (2000) はその上で、複数の添加語の間における語順についても説明を加えている。

前置詞句に対して一番分かりづらいのは、二つ以上の任意の添加成分の語順である。任意の添加成分の枠目内には、次のような順序がある：時間・理由・場所・様態・方法という順番である。

(グロース (2000: 131))

時間及び理由は本稿の用語で、それぞれ時、因果とし、方法に関しては様態とまとめて扱う。よってグロースの見解をまとめると、

時 → 因果 → 場所 → 様態

となる。

1. 2. 2. 5. 井口 (2000) における状況語の語順

山本 (2000) 及びグロース (2000) の主張と同様に、井口 (2000) もまた、補足語と添加語の違いが語順に影響を及ぼすと述べている。

また、井口 (2000) の説明においては、「枠組み」という概念が紹介されている⁹。

ある事柄を述べようとするときに、まずその事柄がいつ起こったのかという「枠組み」を示すというのはドイツ語でも日本語でも自然である。このような場合、[中略] 時間副詞は好んで文頭に置かれる。また、同じような意味で [中略] 場所を表す空間副詞も文頭に来ることが多い。(井口 (2000: 27))

ここで述べられている「枠組み」を示す時、場所の副詞的要素に加えて、因果の副詞的要素も文頭に配置され得ると述べている。また、これらは文中に配置された場合でも、前の方に置かれる傾向があるとしている。さらに、これらによって構成された「枠組み」の中で動詞の意味を補足する副詞的要素、つまり補足語が存在する。それには様態や場所の副詞的要素が挙げられている。それらは文末に配置される傾向がある。この見解についてまとめると以下のようになるだろう。

枠組みを示す時・場所・因果（順不同）→動詞の意味を補足する副詞的要素

後者の、補足語の役割を果たす副詞的要素が後方に配置されるという主張は、他の先行研究と見解を一にするものである。前者の「枠組み」という考え方が、井口（2000）における主張の特徴である。

1. 2. 2. 6. まとめ

ここまで、合計 5 つの先行研究における状況語の語順に関する見解を確認した。それにより判明した点を、以下に表としてまとめる。

	状況語の語順	補足語と 添加語の 区別	前域に状況語 が配置される ことへの言及
Duden (2016)	テーマを示す時→テーマを示す場所 →時→因果→様態→場所	あり	あり
田中・パウアー (2024)	時→因果→様態→場所	なし	あり
山本 (2000)	時・因果・場所（順不同）→様態	あり	なし
グロース (2000)	時→因果→場所→様態	あり	なし ¹⁰
井口 (2000)	枠組みを示す時・場所・因果（順不同）→動詞の意味を補足する副詞的要素	あり	あり

表 3 先行研究における、状況語に対する各種見解

まず状況語の語順に関して、全ての先行研究で見解が同一ではなかったことが分かる。その理由の 1 つについては、各先行研究において、

語順を検討する際に議論の対象としている文成分の範囲が異なっていることが挙げられる。

田中・バウアー（2024）は、補足語と添加語という文法的な側面については焦点を当てず、状況を示すという意味のみにフォーカスして論じていた。一方で Duden（2016）においては方向を示す状況語が独立した要素として取り上げられたし、山本（2000）やグロース（2000）では添加語の後ろに補足語が置かれることが示され、添加語と区別されていた。

しかし、補足語と添加語を分離した上で見解を述べた先行研究においても、語順に関して異なる主張が見られる。それは、様態と場所の副詞的要素に関する語順である。Duden（2016）が様態→場所の順で語順を示したのに対し、山本（2000）及びグロース（2000）は様態の副詞的要素が場所の副詞的要素よりも右側に置かれるとしている。

また、状況語の語順というテーマに対し、中域における語順に議論を限定した先行研究が多いが、山本（2000）及びグロース（2000）を除けば、前域にも着目したものがあった。前域には文の枠組みやテーマを示す文肢が置かれ得ることは、前項までで確認した通りである。

ここまでまとめたように、状況語の語順は、単なる意味的分類のみならず、補足語や添加語という統語的側面や、テーマを示すなどの役割にも絡めて見解が述べられていた。

そこから、状況語の語順について日本語と比較するにあたって、ドイツ語に関してはどの先行研究の主張が有力であるかについて、検証を行いたいと考えた。検証において最も着目すべき点は、次の2つである。1つ目に、様態と場所の副詞的要素はどちらが前方に置かれる傾向があるか、そして2つ目に、前域を使用したテーマの提示についてである。次項以降は、状況語を含む文を1つの作品からピックアップするサンプル調査を行う。それによって、先行研究で見解が分かれていた2つの要素について考察する。

2. Strafeを用いた、状況語に関するサンプル調査

2. 1. サンプル調査について

2. 1. 1. サンプル調査の背景

前章で確認した通り、状況語の語順に関する主張には、先行研究ごとに多少の異なる点が存在することが分かった。そこで、実際にドイツ語圏で出版されたドイツ語の小説を用い、状況語の語順を検証することにした。

2. 1. 2. サンプル調査に用いる資料について

サンプル調査の対象とする文の出典は、Ferdinand von Schirach による、12 話からなる短編集 *Strafe* (邦訳タイトル:『刑罰』) の全 182 頁である。

Strafe は司法や裁判の世界を題材として取り扱った作品である。状況語の特性を考えてみれば、「いつ」「どこで」等の状況を示す語句の出現頻度が高いのではないかと推測した。また、あくまで 1 つだけの作品を用いるサンプル調査である制限から、作者の癖や背景は排除できないものの、現代の作者を選択した。

2. 1. 3. サンプル調査の対象とする文について

1. 2. 2 以下においてまとめた状況語の語順は、井口 (2000) 及び田中・バウアー (2024) を除き、主に中域における理論であった。しかし、これら 2 つの先行研究が示したように、状況語は前域にも置かれることが多い。そのため、前域に現れる状況語も含めた検証が必要であると考えた。よって文中の位置を選ばず、状況語を含む文を全て抽出する。また、主文と同様に副文や不定詞句内に現れる状況語も同様に取り上げている。

2. 1. 4. サンプル調査の方法

サンプル調査は以下の手順で行う。

1. *Strafe* の文章内から状況語が含まれる文をピックアップし、サンプル文としてまとめる。
2. サンプル文中の状況語を、時 (Temporal-)、因果 (Kausal-)、様態

(Modal-), 場所の副詞的要素 (Lokaladverbialien) の 4 つのグループに種類分けをする。

3. サンプル文における 4 つの分類や、語順ごとの割合を調べる。

5 2 の過程において、サンプル文における状況語が 4 つのグループのいずれにあてはまるかは、Duden (2016) 及び井口 (2000) を参考にしている。以下にいくつかサンプルの例を示す。

- (27) Katharina ging nach der Schule oft zur Firma des Vaters,
10 [...] (時) (時) (*Strafe*, S.7)
(28) Deshalb wurden Sie festgenommen. (S.30)
(因果)
(29) [...], sie wird mit dem Priester die Texte aussuchen, [...]
(様態) (S.109)
15 (30) Im Zug umarmte sie ihre Tochter, [...] (S.139)
(場所)

2. 2. サンプル調査の結果、考察

20 2. 2. 1. サンプル調査の結果

結果をまとめたものが、以下の表 4-1 から表 4-3 である。小説内の文において、状況語が含まれると本稿で判断した文は、1453 文であった。表 4-1 には 1 つの文の中に 1 つの状況語が見られた際の、各グループの数を示している。表 4-2 及び表 4-3 には、文中の状況語が 2 つ及び 3 つ以上であったケースにおける、各状況語の語順を示した。以下に結果の全体像を示し、次項以降にその分析を述べる。

Te	Ka	Mo	Lo	計
772	53	224	215	1264

表 4-1 状況語が 1 つ含まれる文における、各グループの個数

TeKa	TeMo	TeLo	KaTe	KaMo	KaLo	MoTe	MoKa	MoLo	LoTe	LoKa	LoMo	計
8	58	50	8	1	2	15	1	4	13	5	9	174

表 4-2 状況語が 2 つ含まれる文における、語順の組み合わせと

その数

5

TeKaLo	TeMoLo	TeLoMo	KaTeMo	MoTeMo	LoTeMo	TeMoTeLo	計
1	6	1	2	1	3	1	15

表 4-3 状況語が 3 つ以上含まれる文における、語順の組み合わせと

その数

2. 2. 2. 全体の概観

10 この調査の主な課題であった様態と場所の副詞的要素の語順や、状況語の前域の使用について述べる前に、調査全体の概観について述べる。

まず、本稿の目的には 2 つ以上の状況語の語順を分析することが含まれていたが、2 つ以上の状況語を含む文が 189 例と、全体の 13.0%
15 であり稀であった¹¹。状況語を含む文の大部分は、1 つの状況語のみを伴うことが分かった。理由の 1 つには、作品の著者の意図により複雑な文を避けるため情報量を制限していることが考えられる。もう 1 つ理由を考察すれば、一度枠組みを構成してしまえば、その枠組みを作る状況語は以降の同一の枠組み内では再度述べられる必要がないこ
20 とが挙げられる。例えば、「今日」という枠組みで時の副詞的要素を用いたならば、以降「どこで」を示す場所の副詞的要素が複数回示されてもその都度「今日」は文章中に現れない。もっとも、「今日」の中で「何時頃」という表現は複数回出現することが考えられるから、より文の情報構造に着目した考察が必要であろう。

25 次に、先行研究で見解が一致していたことについても、検証ができたかを考えてみる。

まず、1 つだけ状況語を含む文を表 4-1 で確認すれば、時の副詞的要

素の出現が他の 3 つに比べて圧倒的な数字であることが分かる。同様に表 4-2 を見ても、時の副詞的要素を含むペアは、他のペアよりも際立って多くの文に見られる。TeKa に対応する KaTe のように時とそれ以外の状況語を含むペアに着目しても、いずれも時が先に置かれる傾向があり、先行研究で共通認識とされた、時が初めに置かれるという主張はこの調査においても肯定できると考える。語順が比較的固定的であるとも言え換えられるだろう。

同様に因果の副詞的要素についても観察と分析を行う。先行研究では、時の副詞的要素の次に因果の副詞的要素が置かれる点で一致が見られている。しかし、TeKa と KaTe 及び KaMo と MoKa のペアは同数であるし、KaLo と LoKa は少数ながらも LoKa の方が多く見られている。このように今回の調査で得られたサンプル文は少数であったし、因果の副詞的要素については時の副詞的要素程、基本語順を肯定できる要素は見られなかった。

まとめると、全体としては、1 つの文に 2 つ以上の状況語が含まれることは珍しかった。なおかつ時と、それ以外の因果や場所等の要素間には文中に現れる頻度と語順の柔軟性に大きな差があることが分かった。時とそれ以外の要素のペアは多くの場合時が先行するのに対し、時を含まない状況語のペアは 2 つの状況語のどちらに語順の優位性が見られるのか明確にならなかった。

2. 2. 3. 様態と場所の副詞的要素の語順について

まず、調査の課題の 1 つであった様態と場所の副詞的要素の関係については、以下の表 5-1 から表 5-4 を用いて分析を行う。以下の表は、表 4-3 より、様態と場所の両方を含む文の数をピックアップしたものである。表 5-1 及び表 5-2 は文中の状況語の個数に着目し、表 5-3 及び表 5-4 は語順に着目し表を構成した。

MoLo	LoMo	計
4	9	13

表 5-1 1つの文に2つの状況語（場所、様態）が含まれる文

TeMoLo	TeLoMo	LoTeMo	TeMoTeLo	計
6	1	3	1	11

表 5-2 1つの文に3つ以上の状況語（場所、様態を含む）が含まれる文

5

MoLo	TeMoLo	TeMoTeLo	計
4	6	1	11

表 5-3 様態→場所の順に並んでいる文

TeLoMo	LoTeMo	LoMo	計
1	3	9	13

表 5-4 場所→様態の順に並んでいる文

- 10 結果としては、問いに応えられる十分な成果が得られたとはいえない。
 様態と場所の両方を含む文は表 4-2 及び表 4-3 に示した 189 例の中で
 24 例であった¹²。その 24 文のうち、表 5-3 及び表 5-4 に示す通り、
 様態→場所の順に並んでいる文は 11 例であり、場所→様態の順の文
 は 13 例であった。表 5-1 を見れば、1 つの文に 2 つの状況語が含まれ
 15 る文においては場所→様態が優勢なようにも思われるが、表 5-2 のよ
 うに、状況語が 3 つ以上含まれるケースを考えれば若干様態→場所の
 順が多いため決定的なことは述べられない。今回の調査では前域も含
 めた検証を行っているが、テーマを示す場所の副詞的要素というカテ
 20 ゴリを Duden (2016) や井口 (2000) が提示していたことをふまえて、
 参考までに、中域のみに場所と様態を含む文を取り上げてみる。する
 と結果は様態→場所は 8 文、場所→様態も 8 文となった。ここでも大
 きな差は見られなかった。

2. 2. 4. 状況語と前域の関わり

2 つ目の着目すべき点であった前域の使用については、表 6 に結果をまとめる。各枠内に示す数字は、表 4-1 から表 4-3 に示した文の中で前域に状況語が配置されていた文の数である。

5

Te	Ka	Mo	Lo	計
356	24	23	88	491

表 6-1 状況語が 1 つ含まれる文において、前域に状況語が含まれていた文の数

TeKa	TeMo	TeLo	KaTe	KaMo	KaLo	MoTe	MoKa	MoLo	LoTe	LoKa	LoMo	計
3	34	37	3	0	1	4	0	3	8	2	2	97

表 6-2 状況語が 2 つ含まれる文において、前域に状況語が含まれていた文の数

10

TeKaLo	TeMoLo	TeLoMo	KaTeMo	MoTeMo	LoTeMo	TeMoTeLo	計
1	4	1	2	1	2	1	12

表 6-3 状況語が 3 つ以上含まれる文において、前域に状況語が含まれていた文の数

15 この調査を通じて、前域は文全体における状況語の語順を語るにあたって欠かせない観点であることが改めて確認できた。まず、表 6-1 における Te は、772 例中 356 例（全体の 46.1%）が前域に配置されており、Ka は 53 例中 24 例（45.2%）、Mo は 224 例中 23 例（10.2%）、
20 Lo は 215 例中 88 例（40.9%）である。ここでの着眼は前域のみであるが、様態以外の副詞的要素が文のテーマを示す「枠組み」を作成し、文の中で先に配置されやすいとした井口（2000）の理論は肯定できるかもしれない。

さらに、2 つ以上の状況語を含む 189 例の文において、前域に状況語が置かれていた文は、表 6-2 と表 6-3 の合計を合わせれば 109 例
25 （57.6%）であった。2 つ以上の状況語の語順を論じるにあたっては無

視できない割合であると考え。加えて興味深い点は時、場所の順で2つの状況語が、前域に配置されるケースが3例あったことだ。(31-33)にその文を示す。該当箇所である前域には下線を引いてある。

- 5 (31) Später, auf der Party, trank sie zu viel. (S. 9)
 (32) Später, in dem Prozess, erklärten die drei Russen
 überraschend, [...] (S. 35)
 (33) Später, unter der Dusche, wird ihm schwindelig, [...] (S. 74)

10

これらの文には、時間と場所の副詞的要素が2つとも前域に現れている。Duden (2016: 894)によれば、前域に複数の要素を配置することは許容され、これらは自然な文である。この興味深い点は、テーマを設定する時間と場所という概念が肯定される点である。Duden
15 (2016)によって示された、テーマを示す副詞的要素には時間と場所の2つが挙げられ、その順番も時→場所であった。(31-33)の用例はそれに則った語順をしている。

さて、時と場所をテーマのくくりで示すことには説得力が増したが、井口(2000)の提示した、文のテーマを示す「枠組み」という要素には因果の副詞的要素が含まれていた。しかし今回の調査で、因果の副
20 詞的要素を含む文に関しては、先の用例のような、複数で前域に用いられるケースは今回見受けられなかった。そのため枠組みの因果については語順の検討は加えられなかった。因果の副詞的要素に関しては、以下の用例のように前の文と繋がりを持つ副詞的要素を含む文が表
25 6-1に示す24例のうち13例と半分以上を占めている。該当する因果の副詞的要素には下線を引いた。

- (34) [...] Deshalb wurde das Geschoss nach links ausgeworfen. (S. 50)

30

よって、別なルールによって前の方に配置される可能性も否定できない。例えば、代名副詞のように旧情報は先に出されるであるとか、あ

るいは接続副詞であるために先に出されている、といった可能性が考えられるだろう。ここから、中域のみの理論はもちろん重要であり、さらなる検証を進める必要があるが、状況語と前域の親和性にも着目した考えも重要であると思われる。

5

2. 2. 5. まとめ

前項までで分かったことをまとめる。まず、時の副詞的要素は先行研究において共通して、最初に配置されることが主張されており、調査においても同様の傾向が確認された。次に、因果は先行研究においては時の後に配置され、様態及び場所の前に配置されるとされていたが、調査においては十分なサンプルが得られず、実際の文を用いた検討は加えることができなかった。そして調査の主眼の1つであった、先行研究で語順の見解が分かれていた様態及び場所の副詞的要素については、約20例のサンプル文が得られたが、どちらが先行するかの傾向は10
15
は見られなかった。そして、前域にも状況語は頻繁に配置されることが確認でき、その中では時、場所、因果の副詞的要素が前域に配置される傾向があった。これは文の枠組みを示す状況語が多く含まれていたと言えるだろう。

以上より、今回の調査の結果として本稿で示す状況語の基本語順は、20
井口(2000)の示した「枠組み」と、Duden(2016)及びグロース(2000)の理論を組み合わせた、

枠組みの時→枠組みの場所・因果（順不同）

→時→因果→場所・様態（順不同）

25

である。「枠組み」を構成する状況語は確かに前域に配置される傾向があるが、必ずしも前域に配置されるとは限らない。井口(2000)によれば、文中に置かれることもあり、その場合でも前の方に配置されるとしている。以下、文中に「枠組み」を構成する副詞的要素が配置される例を示した例文及び日本語訳を井口(2000: 28)から引用する。30
下線部は筆者が、枠組みの副詞的要素にあたる語句に引いた。

(35) Treffen wir uns heute am Abend in der Stadt?

(今晚は町で会うことにしないか。)

ここでは、文の形が決定疑問文であるため前域には何も配置されず、
5 枠組みの副詞的要素が中域に現れている。また、従属接続詞や関係代
名詞から始まる副文でも、前域が使用されないことから、(35)と同様
に枠組みの副詞的要素が中域に現れることがある。

3. 日本語の状況語とその語順、及びドイツ語の状況語との比較

10

3. 1. 日本語の状況語とその語順

3. 1. 1. 日本語の状況語を検討するにあたって

前項までで、ドイツ語の状況語について、関連する語句の用語の確
15 認や、基本的な語順の検討を行った。本項では、日本語とドイツ語に
おける状況語の語順を比較するため、日本語にフォーカスを変更して
状況語について論じる。この章の目的は、日本語にも状況語が存在し、
ドイツ語と比較できる要素が見いだされることを示すことである。

20 3. 1. 2. 日本語の副詞的要素

ドイツ語の副詞的要素は、品詞としての副詞のみならず、文中で副詞
の役割を果たす語、もしくは句を指す。この概念は、日本語において
状況語を検討する際にも同様に用いることができると考えられる。な
ぜなら、日本語でも「副詞」、「名詞＋（格助詞）」、「形容詞の連用形」
25 など、様々な形で副詞的な記述が可能だからである。例として、以下に
(36)を挙げる。(36)における下線部の語句は品詞として、先頭から
「副詞」「名詞＋格助詞」そして「形容詞の連用形」である。それぞれ
品詞は異なっているが、いずれも副詞的な用いられ方をしている。

30 (36) 生成 AI は、いずれ、仕事の場でも 広く用いられるようになる
だろう。

よって、前置詞句のように日本語には見られない要素は存在するが、日本語にも、ドイツ語の副詞的要素に相当する表現が存在するとみなすことが可能であろう。

5 3. 1. 3. 日本語の状況語

ドイツ語の状況語は、命題内機能を持つ。前項では日本語に副詞的要素とみなせる複数の表現形式が存在することを確認したが、本項では続いて日本語における命題内機能と命題外機能について確認する。

まず仁田（2002: 33）は、日本語文について、「命題（言表事態）」
10 と「モダリティ（言表態度）」に分かたれるとした。モダリティに関わるモダリティ修飾成分は、仁田（2002: 11）によれば、話し手の評価的態度や認識的なとらえ方の程度性や伝え方を表したものである。これに関して、第1章で述べたドイツ語の命題外機能を持つ副詞的要素と非常に近い成分である。次に命題内で働く文の成分について、仁田
15 （2002）では命題内修飾成分と状況成分が紹介されている。命題内修飾成分は本稿での様態の副詞的要素に、状況成分は本稿での時・因果・場所の副詞的要素に対応する。第1章で確認した通り、ドイツ語の状況語は、時、因果、様態、場所の4つに分けられる。日本語にも同様にこれらの状況を表す語句が存在すると言える。小池（1994: 111, 112）
20 からそれらの例文をあげる。以下、(37) は時間、(38) は因果、(39) は様態、(40) は場所を表す要素を含む文である。

(37) 六時に 駅で会おう。

(38) 先週、風邪で 学校を休みました。

25 (39) 一人で 散歩する。

(40) 公園に 桜の木がある。

以上から、日本語にも命題内機能を持つ副詞的要素、すなわち状況語を認めることが可能であり、ドイツ語の基準に合わせた評価が可能
30 だと思われる。ドイツ語の状況語のグループが詳細な意味の内訳を持つ、比較的大きなまとまりであったことと同様に、日本語の状況語の各グループにもそれぞれ複数の意味が存在する。様態を例にあげれば、

手段を表す手段格や、動作を共に行う人を指す共格である。ドイツ語では、表1の Modaladverbialien において、instrumental や Begleitung が含まれているように、これら手段格や共格は日本語でも様態として扱うこととする。

5

3. 1. 4. 日本語の補足部と修飾部

3. 1. 4. 1. 補足部と修飾部

次に統語的側面からも日本語の状況語を整理する。ドイツ語では補
10 足語 (Ergänzungen) と添加語 (Angaben) という考え方があった。
本稿で研究対象とする状況語は、添加語としての状況語に限定してい
たため、次は日本語において同様の概念が存在するかを検討する。小
池 (1994: 101) によれば、日本語には「補足部」という考え方がある。
ある表現に対し情報が欠けていれば、質問の必要性が出るのだが、補
15 足部はその名の通り、欠けた情報を補足する。補足部は形態的に「体
言+格助詞」で形成される。具体的な例を (41a-d) の会話を用いて示
す。欠けた情報を補足する質問と、補足する夫の回答が名詞と格助詞
で構成される点に着目してほしい。この会話は小池 (1994: 101, 102)
が補足部の役割を示すために作成したものである。

20

(41a) 夫 遊んでいるよ。

妻 誰が？

夫 太郎が。

25

(41b) 夫 太郎が遊んでいるよ。

妻 どこで？

夫 中央公園で。

30

(41c) 夫 太郎が中央公園で遊んでいるよ。

妻 一人で？

夫 まゆみちゃんと。

(41d) 夫 太郎が中央公園でまゆみちゃんと遊んでいるよ。

妻 あら、そう。

夫。

5 このように、会話中で夫が示す表現には、妻が求める情報が欠けているため、その都度妻は夫に質問を返し、情報を完全にしている。つまり、この一連の会話においての「遊ぶ」という動詞は、「主格」、「場所格（デで表される）」及び「共格（ト）」を要求していたと言える。このように補足部は格¹³に関する情報を補足して、情報を完全なものにする働きをする。

10 用言が補足部としてどのような格を要求するのかについて、小池（1994: 106, 107）は以下のようにまとめている。

15 「買う」「書く」「読む」などが対格を必要とし、「結婚する」「喧嘩する」などが共格を必要とし、「出発する」「でかける」などが起点格を必要とすることは、これらの語彙的意味から自明である。このように、語彙的意味から容易に推定される格をその語の潜在格といい、潜在格を必要とすることを、その語の潜在的格要求という。その潜在的格要求にこたえるものが補足部である

20 (小池, 1994: 106, 107)

一方で小池（1994）は、補足部に対して、さしあたり必要な情報でない評価的情報を表す文の成分は「修飾部」としている。修飾部は形態的に、副詞や用言の連用形として現れる。話者の評価的情報を示すというのは命題外機能（言表態度）に関するものであり、命題内機能を扱う今回のテーマとは一致しない。しかし小池（1994）の、修飾部のうちの「連用修飾語」の説明では、命題外機能に加え、情態副詞（様態の副詞と等価）も修飾部に数えられており、

30

「体言＋格助詞」で構成される補足部と副詞、用言の連用形などによって構成される修飾部とでは質的には異なるが、「情態副

詞的・様態修飾」と「状態格補足」及び「情態副詞的・結果修飾、内容修飾」と「内容格補足」などは構文上の働きは同一と
いってよい。(小池, 1994: 170)

5 と説明がなされている。

ドイツ語の状況語は、形態的に同一であっても統語的役割によって
補足語であるか添加語であるかが分かれていた。例えば *auf dem Tisch*
という前置詞句は、どのような動詞が文を構成するかによって、同じ前
置詞句でもその統語的役割が異なる。一方で小池(1994)が示す日本
10 語の補足部と修飾部は、動詞が要求するか否かの統語的性質に加えて、
形態的性質でも異なっている。

3. 1. 4. 2. 補足部の添加性

前項では、さしあたり必要でない情報を表すものについて、修飾部
15 というカテゴリがあることを紹介した。これは補足部と対応して取り
上げられていた。しかし本稿では、用言によって要求されていなくとも
添加が可能な補足部について考えてみたい。つまり、修飾部の役割
を持ち、補足部の形態をとるものである。上記の引用では、内容格と
情態格のみに焦点が当てられていた。しかし例えば時格や場所格など
20 はどうだろう。これらは大抵の文に付加が可能である。現実世界で行
われる行為に対し、「いつ」その行為をしたのか、「どこ」でしたのか
等は、話者の選択により発言することが可能である。つまり、これら
は必ずしも動詞の潜在的格要求によって求められる補足部ではないと
いうことである。小池の示す定義では、補足部は潜在的格要求にこた
25 えるものであるから、話者の選択で発言される時や場所の文成分は補
足語の定義に当てはまらない。しかし時格や場所格などは「名詞(＋
格助詞)」によって構成されるものであり、形態的には補足部である。
仁田(2002)の説明を見れば、

30

[前略] 述語成分と共演成分¹⁴によって、文の基本部分・骨格が
出来上がり、その事柄的意味の中核が形成される。述語成分と共

演成分によって形成された事柄的意味の中核は、状況成分や命題内修飾成分を付け加えていくことによって、拡大され限定されていくことになる。(仁田, 2002: 23, 24)

5 と述べている。さらに仁田(2002: 24)が時の状況成分として紹介している文の中には、補足部の形態を持った文が登場している。このように、潜在的格要求による補足部(共演成分)と、そうでなく添加が可能な補足部(状況成分、命題内修飾成分)は分けて考えることが可能だと思われる。以降本稿では後者を修飾部の一部とし、修飾部と呼称
10 する。

3. 1. 5. 結合価の観点

小泉(2007)は結合価の概念を日本語に適用した理論を展開している。ドイツ語では、ある語句が補足語であるか、添加語であるかの判
15 断にあたって結合価の概念が重要であった。日本語においても、潜在的格要求を判断するために、結合価の概念を用いることが可能だろう。小泉(2007)は、補足部を「行為項」、修飾部を「状況項」としている。また、状況項の配列に対し、

20 状況項には、時間、場所、様態などの種類があるが、これらの間にもある序列が見られる。[中略]日本では、動詞結節の左側に時間、場所、様態の状況項と[中略]並べられる。(小泉, 2007: 184)

と述べている。このように、日本語にも結合価の概念は適用が可能で
25 あり、なおかつ状況語と同様の概念が存在することが分かった。

3. 1. 6. 日本語の題目部

ドイツ語には前域と呼ばれる領域が存在し、そこにはあらゆる文肢を配置することができ、その中でもテーマを示す語句が前域を占める
30 ことが多いと述べた。日本語にも同様の役割を担う文中の場所が存在する。それが、小池(1994)が示す題目部である。ここに配置される語句も前域同様自由であり、主に「は」を伴って表現されることが多

い。例えば「私は」と題目部に置けばその文は「私」をテーマとして展開される。そしてここに状況語を配置することも当然可能である。以下の例文（42）（43）における下線部は題目部を示している。

- 5 （42）今日は私が掃除当番です。
 （43）公園にはたくさんの遊具があります。

このように、時や場所が題目部を占めることもある。この題目部が展開された後、ここまで紹介した補足部や修飾部が入る解説部が続けて述べられるから、ドイツ語における状況語の標準的語順に示したように、これら題目部も、織り交ぜて示した方が良好だろう。

3. 1. 7. 日本語における状況語配列の例

前々項では、小泉（2007: 184）の示す状況項の配列を紹介した。もう一度まとめると、

時→場所→様態

である。ドイツ語ではここに因果を含め4つのグループとしていたが、ここでは紹介されておらず、基本的な語順は不明である。

もう1つ基本的な語順のモデルを紹介しているのが、小池（1994: 115）である。以下に表を引用する。小池（1994）は、これはあくまで標準的な語順であり、それぞれの要素は互いに語順が入れ替わることは普通のことであるとしている。

	時格	I			
	場所格	II			
	主格	III			
与格	能動格	使役格 被使役格	IV		
	方向格	着点格	V		
狀態格	手段格	道具格	材料格	依拠格	VI
	付着格	原因・理由格	共格	对格	VII
				内容格	VIII

表 7 日本語における補足部の標準的語順

これを大きなグループにまとめてみる。時格や場所格はそのまま時と
 5 場所にできる。道具格、手段格、状態格、共格及び内容格は様態とし
 て、原因・理由格は因果とできるだろう。共格が原因・理由格と同じ
 レベルで示されており、内容格はそれより後ろのレベルで示されてい
 る。そのため、これを並べれば、

10 時間→場所→様態・因果（順不同）

ということになろう。先述の小泉（2007: 184）と、共通している点は
 時間、場所及び様態の並びである。ここに前項で述べた題目部を付け
 加えると以下のように示することができる。

15

題目部（テーマ）としての状況語→時間→場所→様態・因果（順不同）

3. 1. 8. まとめ

日本語の状況語について、複数の先行研究から見解を集めた。結論を以下にまとめる。

- 5 まず、日本語にも副詞的要素からなる状況語が存在した。そして補足部と修飾部という考え方があり、これはそれぞれドイツ語の補足語と添加語と同様のものである。補足部は用言が持つ潜在的格要求によって決定され、さしあたり必須ではないものは修飾部となる。そして基本的な状況語の語順は、題目部の後、時間、場所、様態もしくは因果と続く。
- 10

3. 2. ドイツ語と日本語における状況語の配列の相違点

- 最初に、第1章、第2章及び本章前項までで確認したドイツ語と日本語の状況語の基本的な語順について、ここで再度まとめる。まずドイツ語は、
- 15

枠組みの時→枠組みの場所・因果（順不同）

→時→因果→場所・様態（順不同）

- 20 であり、日本語は、

題目部（テーマ）としての状況語→時→場所→様態・因果（順不同）

とまとめられる。

- 25 この2つの語順における共通点は、まず時、場所等の意味を超えて前に配置される、テーマを示す要素が存在することである。ドイツ語ではこの部分が文の左側に集まる傾向があり、前域に配置されることも少なくなかった。日本語でも同様に、解説部が現れる前に、題目部としてテーマの部分が先に現れる。
- 30 次にテーマ以外の状況語について見ていく。時がその中で一番手前に配置されるのは共通点と言えそうだ。その次に配置されるグループから違いが見て取れる。ドイツ語では因果が先に配置されるのに対し、

日本語では場所が来ている。そして、その後に来る 2 つのグループはどちらの言語においても順番が確定していなかった。ドイツ語は場所、様態の 2 つであり、日本語は様態、因果であった。このように、時以降の配置は日本語とドイツ語で対応が見られない。このような基本的語順の違いを参考にすれば、時間→因果→場所の順で構成されたドイツ語は、日本語で表現すれば、時間→場所→因果の順になると予想がたてられそうだ。なぜなら、基本語順の上では、日本語では時の次には場所が置かれることになっており、ドイツ語の語順のように時のすぐ後に因果が置かれていないからだ。実際にそのような文を *Strafe* から抜粋し、確認する。各用例に含まれる、該当する副詞的要素には下線を引いた。

- (44) Sechs Jahre später stirbt Ascher an Leberkrebs in einer Klinik. (S. 136)
- 15 (45) 六年後、アッシャーは肝臓がんにかかり、病院で息を引いた。
った。(『刑罰』164 頁)

この文においては、結果は同じ語順と言える。6 年後という、時間によるテーマの構造が作成され、以下の文に続いているが、いずれの文でも因果を表すすい臓がんと、場所を表す病院が続けて述べられている。物語の観点では、アッシャーは自身の家に強くこだわりを持っていたから、そんな彼が病院で息を引き取ってしまうという印象付けのため、日本語訳でも場所を後ろに置いたと考えることも可能だろう。

これと同様のケースが、時間→様態→場所の順で構成されたドイツ語の文を訳した日本語でも確認された。該当の状況語には下線を引いた。なお、日本語訳の文では副詞的要素の意味によって境目を明確にするため、空白を挿入している。

- (46) Fünf Tage nach der Tat rutscht Ascher nachts betrunken auf der Kellertreppe aus, [...] (S. 130)
- 30 (47) 事件から五日後、アッシャーは夜中に 酔っぱらって 地下室の階段で足を踏みはずし、[後略] (157 頁)

(47) の用例では、日本語において標準とされる時間→場所→様態ではなく、アッシャーの様態を表す語が、踏み外した場所よりも先に示されている。

- 5 これらから、確かに標準とされる語順の上では、状況語の並びに差異が見受けられたが、先ほどの用例を見ても両者が同じ語順であることによって生まれる違和感は全くないと言って良いだろう。そして(45)と(47)が、それぞれ以下の(48)と(49)のようであっても違和感はない。各状況語には下線を引いた。

10

(48) 六年後、アッシャーは病院で 肝臓がんにより息を引きとった。

(49) 事件から五日後、アッシャーは夜中に 地下室の階段で、酔っぱらって足を踏み外し [後略]

- 15 また、ドイツ語において因果→様態の語順を示している文(50)が日本語訳(51)でどのようにされているかを確認してみる。ドイツ語の用例における下線部は因果を示す状況語である。

(50) [...], die Kunden hätten dafür alles mit ihr machen dürfen.

20

(S. 158)

(51) 客は女になにをやっても良かった。(187 頁)

文脈としては、この場面の登場人物である「女」は客に買われており、お金を払ったため、客は女になにをしても良いという話の流れである。

- 25 語順の参考にはならなかったが、お金の話が *dafür* として代名副詞となり、日本語でその部分が省略されているのは、ドイツ語と日本語の省略の性質が異なっていることを示しているかもしれない。これは多くの代名詞に共通する話であるため、状況語に限った話ではないが、代名詞の省略可否性は状況語の語順を考える上でもやはり欠かせない
- 30 観点になるだろう。

このように、標準的語順はやはりあくまで標準であり、状況語というカテゴリ内で自由に配置され得ることは先行研究でも多々示されて

いることである。その点に関してこの章ではより強い証拠を得ることができたと考える。また、代名詞であるか否かのように、その語が持つ情報の重みや、物語全体の文脈によって強調したい意味を持つ語など、複数の要因によって自由に変わり得ることが予想できた。

5

4. 終わりに

4. 1. ドイツ語から日本語を理解するにあたって

10 今回扱った作品と、作品を訳した翻訳者のケースではドイツ語と日本語の状況語における語順に関して明確な違いを見出すことはできなかった。むしろ原文と翻訳で語順が同じケースも見受けられた。

この点から、ドイツ語から日本語に翻訳する際、もしくは単に理解する際、状況語に関しては大きな労力を用いて変換する必要がないと言えるかもしれない。テーマを示す状況語はほとんどの場合、「は」を
15 伴って現れる日本語の題目部にあたると考えて良いだろう。例外はテーマを示す因果の副詞的要素である。これは、時の副詞的要素「今日は、昨日は」あるいは場所の副詞的要素「公園では、学校では」のように「は」を伴うことができない。

20 上述したのは語順についてだが、状況語の語句が持つ意味についても検討を少し加えたい。観察の結果、興味深い点に気づいた。それは、文脈により意味の解釈が変わり得る語句が存在することである。例えば、auf dem Weg や in der Schule のような句を考えれば、単に「道の上」という場所を示すこともあれば、「(どこかへ向かう) 途上」のように、時間の概念を表現することも可能であろう。in der Schule も
25 同様に、「学校の中」を示すか、あるいは「学校時代、学校に通っていた頃」のように時間の解釈がなされることもある。1つの訳の例だが、実際に (52a) の文にある in der Schule は、日本語の訳文 (52b) において後者の解釈がされている。用例の該当部には下線を引いた。

30 (52a) In der Schule hatte sie es schon gekannt, [...] (S. 11)

(52b) 学校に通っていたころからすでに気づいていた。(17 頁)

このように、必ずしも語句と意味が一对一で対応していない場合は、テカモロのように、意味によって優先される語順を仮定すれば、ドイツ語を理解する際に意味を判別する手助けになるかもしれない。

5 4. 2. 日本語からドイツ語を作成するにあたって

また、逆に日本語文からドイツ語文を作るにあたって、単に個々の単語の意味に集中するのではなく、まずその語句がどのような役割を担っており、かつ添加語なのか補足語なのかに注意する必要がある。役割としては、会話においては尋ねられている、レーマになり得る要素やテーマが何かを意識する必要がある。そして方向を示す場所の副詞的要素のように、補足語である語はやはり後ろ側に来ることは留意しなければならない。特に方向については、日本語では方向格の後に状態格がやってくるため、

15 (53) 大学へ 急いで行く。

という表現に対し、この補足語の特性に注意しなければ、

20 (54) Ich gehe zur Uni rasch.

と、ドイツ語の基本的な語順からは外れてしまうことに注意が必要である。

添加語の配列については、ドイツ語においてテーマを示す状況語と題目部は共通の要素であり相互に応用が利くことが分かった。中域における状況語については、第3章で日本語訳を観察することで、日本語に関してはドイツ語に合わせた配列の入れ替えが確認された。しかし、独作文においてこれと同様の柔軟性を持つかはここでは明確にできていない。そのため、ドイツ語の状況語の基本的な語順である、時→因果→場所・状態（順不同）については日本語との違いとして留意しておくべきだろう。

4. 3. 調査の限界と今後の課題

今回のサンプル調査では、様態と場所の副詞的要素に関して標準的な語順を明確にすることはできなかった。調査の副産物としていくつかの事実は垣間見えたものの、今回の手法では以下に示すように、調査の対象を絞り切れず、研究対象が広域にわたってしまったと考える。今後取り組むべき課題を以下に挙げる。

まず、調査の課題の1つであった、状況語が前域に現れる事象については、十分にケースが集まったと思う。そのため、次は副文のみを集めた調査が求められる。テーマ以外の状況語のみを純粹に比較するには、全ての状況語が中域に集まった文が最適であると思われる。

2つ目の取り組むべき課題は、代名副詞や接続副詞等の、状況を示す意味機能の他に、文脈上の機能を持った状況語についての分析を進めることである。例えば代名副詞や接続副詞は、文脈上の機能として前の文と繋がりを持つ機能を持っている。以下の用例における下線部がその状況語である。

(55) Trotzdem habe die Staatsanwältin den Erlass eines Haftbefehls beantragt. (S. 105)

この用例の Trotzdem は、日本語訳において「それでも」と訳され、「それ」が何を指し示しているかは、前の文から理解する必要がある。他にも前の文と繋がりを持つ状況語を含む例を (56) に示す。

(56) Er ist krank, deshalb kann er nicht arbeiten.

この用例における下線を引いた deshalb は、副詞であり因果の意味を持ちつつも接続詞の役割を果たしている。このような場合は単に意味のみならず、文における役割によって文中の配置が影響されている可能性がある。そのため、このような代名詞や接続詞の機能を兼ね備えた状況語と、前の文と繋がりを持たない普通の状況語を区別して調査すれば、より細分化されたシチュエーションにおける語順のモデルを示すことが可能であろう。前の文の影響を受けない局所的な状況語の

基本語順を確定するには、文脈上の機能を持つ状況語を除いた調査が望ましいだろう。

3 つ目の改善点に、日本語の文章から翻訳されたドイツ語の文章を観察することが挙げられる。今回は、ドイツ語で表現されているが日本語で表現されていない要素があることが確認できた。同様に、日本語の文章からドイツ語の文章へ翻訳されたデータを観察することによって、日本語の状況語がドイツ語に変換される過程において、省略の可否のような特徴が現れるか特定できる可能性がある。両方向の翻訳結果を比較することで、状況語の扱いについて、基本的な語順以外の観点からも検討することができるだろう。

4 つ目は、中心となるデータの偏りを無くすことである。今回取り上げた作品中には話し言葉が含まれてはいたが、書き言葉が割合上多かったため、書くことと話すことに依存する要素があると仮定するならば、それについては別途検討が必要である。また、作者の癖や特有の表現を加味した上での分析は難しいため、大規模な調査を行う際には年代や方言等、加味すべき要素が増えることになるだろう。これらの課題を克服する手段には、話し言葉も含めたコーパス等の大規模なデータから状況語をピックアップすることが挙げられる。しかし、副詞的要素の形式の豊富さや状況語に該当する語の多さを考えれば、語句の指定を行った検索は困難なことが予想される。文脈を介して意味を捉えることが必要な語句が存在することも本稿で示した通りである。しかし、いくつかの条件をクリアすれば AI による収集を行うことも可能ではないかと考えられる。まずは前後を伴う一連の文章を集めることである。これは文脈を明確にするためである。次に、収集する状況語の範囲を明確に指定することである。そして次の条件は、人間が行う収集と同じ条件下で調査を行わせることだ。単独の単語を指定して調査をすることが困難であることは先述の通りである。状況語には補足語と添加語が存在し、意味的な分類としては、時、因果、様態、場所が存在することを示さなければならない。このような細やかなラベル付けを自動的に行うことができたなら、人の手では莫大な時間がかかる大規模収集を AI に任せることができ、データの偏りを削減することに大幅な労力を割くことはなくなるだろう。結局は人が行う収

集と同じ前提を完璧に構成し、AIには処理の負荷のみを担当させる使い方が現在では有力な使い方だと思われる。また大規模なデータの収集を目指し AI を用いる際には、著作権等の倫理的観点にも配慮が必要であり、分野を超えた知識が必要になる。

5

注

1 Duden (2016) によれば副詞は不均質であり、定義は困難であるが、2つの共通点が挙げられるという。1つは、一部には比較変化の例外が存在する (oft, bald etc.) が、語形変化をしないこと、そして2つ目は単独で前域 (Vorfeld) への移動が可能なことである。

2 与格は前置詞と結びつくことで副詞的要素になり得る (auf dem Balkon, in der Stadt etc.)。

3 厳密に言えば、mit wem...?や trotz welchen Umstands...?、in welcher Absicht...?のように、疑問に対する回答は状況語であるものの、疑問副詞で問われないものも存在する。

4 <https://grammis.ids-mannheim.de/verbvalenz>

5 Duden (2016: 797) においてこの項目は schlecht erfragbar とされており、対応する疑問詞が記載されていない。よって対応する右枠を空白としている。

6 表1のドイツ語に対応する日本語訳を以下の表にまとめる。

時の副詞的要素	疑問詞
・時刻、時点 (1) ・期限 ・時間的な起点 ・期間、時間の長さ (3)、反復 (2)	・いつ? ・いつまで (に) ? ・いつから? ・どれほど長い間? 頻繁に?

因果の副詞的要素	疑問詞
・狭義の理由、原因 (4) ・条件付けの: 条件 ・連続的に導かれる: 帰結、結果 ・目的 ・譲歩: 効力のない反論理由	・なぜ? ・どのような場合、状況で? ・どのような意図で? ・どんな状況にもかかわらず?

25

様態の副詞的要素	疑問詞
・やり方、行動の仕方（7）、（9） ・度合い、量、強度 ・段階的な差異 ・素材の性質 ・手段や道具（8） ・同伴者、連れ（6）	・どのように？ ・どれだけ？どんなに？ ・どれだけ（差がある）？ ・何から？ ・何で、何によって？ ・誰と？

場所の副詞的要素	疑問詞
・地点（10） ・方向、道のり、目的地 ・起源、出所 ・場所的な広がり、大きさ	・どこで？ ・どこへ？ ・どこから？ ・どのくらい広く？

⁷ temporal, kausal, modal, lokal の最初の音節をローマ字読みしたもの。

5 ⁸ グロース（2000）は補足語と添加語についてそれぞれ、「補足成分」「添加成分」という用語を使っているが、これらは本稿でいう補足語と添加語にあたるため、引用以外の本文では用語を統一して示した。

⁹ 井口（2000）では前域を文頭、中域を文中としている。

10 ¹⁰ 山本（2000）及びグロース（2000）は、状況語との関連では前域について触れてはいないが、既知のものを配置し話の幕開けを行う機能を説明している。

¹¹ 4つの状況語のグループが1文で用いられたケースは今回見受けられなかった。

15 ¹² 表3-2における MoLo、LoMo、表3-3における TeMoLo、TeLoMo、TeMoTeLo、そして LoTeMo を数えている。

¹³ 名詞類が文の中で他の単語に対してとる関係のあり方をあらわす文法カテゴリ（仁田他，2000: 49）

¹⁴ 仁田（2002）は補足部にあたるものを共演成分と呼ぶ。

20 参考資料

Ferdinand von Schirach: *Strafe*. München: Luchterhand

Literaturverlag 2018.

フェルディナント・フォン・シーラッハ『刑罰』酒寄進一訳、東京創元社、2022年。

参考文献

- Duden: *Duden, die Grammatik: unentbehrlich für richtiges Deutsch.*
9., vollständig überarbeitete und aktualisierte Auflage.
5 Dudenverlag 2016.
- 井口靖『副詞〈ドイツ語文法シリーズ〉5』大学書林、2000年。
小池清治『日本語はどんな言語か』筑摩書房、1994年。
小泉保『日本語の格と文型－結合価理論にもとづく新提案』大修館書店、2007年。
- 10 田中雅敏、バウアー・ラース『ドイツ語文法大全』語研、2024年。
トーマス・ミヒャエル・グロース「日本人に間違いやすいドイツ語の語順（日本人の間違いやすい外国語(その1)）」『文明 21』5号、2000年、235－260頁。
中島悠爾、平尾浩三、朝倉巧『必携ドイツ文法総まとめ－改訂版－』
15 白水社、2003年。
仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人『文の骨格』岩波書店、2000年。
仁田義雄『副詞的表現の諸相』くろしお出版、2002年。
山本博志「日本語とドイツ語の配語法」『独仏文学』34巻、大阪府立
20 大学独仏文学研究会、2000年、149－169頁。